

昔々、あるところに、小さなカエルが深い深い井戸の底に住んでいました。小さなカエルには喉が乾けば飲める水があり、お腹がすけば食べられる虫もありました。疲れると、仰向けに寝転がることもできました。そして井戸の上の、高い高いところに見える空を見上げることもできました。

小さなカエルは、一度も井戸の外の世界で暮らしたことはありませんでした。ひとつのことを除いては、自分の人生に満足していました。彼は人恋しくて、一緒に遊ぶ人が欲しかったのです。動物が水を飲みに井戸へやって来ると、小さなカエルは井戸の上に向かって、「こんにちは!」と叫びました。「こっちに降りてきて、僕と遊んでくれない? 食べ物も、水もあるし、住むにはなかなかいい場所だよ。これ以上いい場所なんて、ないくらいだよ」

しかし他の動物は言うのです。「小さなカエルさんよ、ありがとう。だけど僕たちはこっちにいる方が好きなんだ。世界はもっと大きくて、井戸の底なんかよりもっといいところなんだよ」しかし、小さなカエルは言うのです。「ここよりいいとこなんてない!」

鳥たちが井戸の中へ入ってきては水を飲むので、小さなカエルと一緒に遊んでくれるようお願いしました。「君が外に出てきて、僕らと遊ぶべきだよ」と鳥たちは言いました。「世界はとっても大きくて、井戸の底なんかよりもっといいところなんだよ」しかし、小さなカエルは信じません。「僕の家よりいい場所なんてあるものか」と小さなカエルは言うのです。

小さなカエルは何度も同じことを言うので、ほとんどの鳥や動物は、カエルと話すのを止めてしまいました。小さなカエルはなぜだか分かりませんでした。しかし、一番腑に落ちないのは、どうして誰も、自分が住んでいるこの場所には来たがらないのか、ということでした。ある日、小さなツバメがまた水を飲みに、井戸へとやって来ました。ツバメは小さなカエルに、自分と一緒に、外の広い世界へ行かないかと聞きました。「世界はとっても大きくて、井戸の底なんかよりずっといい場所なんだよ」

小さなカエルは言いました。「どうして嘘を言うんだい? ここよりいい所なんてないよ!」ツバメは怒り、飛び立って行ってしまいました。それでも、ツバメは井戸の水を飲みに、何度も戻ってきました。いつも小さなカエルはツバメに残って、自分と遊ぶよう誘いました。いつも、ツバメは小さなカエルに、井戸の外にある大きな世界のことを話そうとしました。そうしていつも、ツバメは飛び立って行くのでした。

そしてある日、ツバメが井戸に飛び降りてきました。しかし、話す代わりに、ツバメは小さなカエルを掴み、小さなカエルを連れだのまま、井戸の外へ飛び立って行きました。始め小さなカエルは、井戸の外の眩しい日差しで何も見ることができませんでした。それから、目を開け、空中の高いところから世界を見渡しました。

小さなカエルは驚きました。世界は自分が思っていたよりもずっと大きかったのです。小さなカエルは自分がどれだけ小さいか、気づき始めました。「ツバメさん、ありがとう。教えてくれたことに、感謝するよ。君を信じなくてごめん。ここで下ろしてくれるかい?」と言いました。

ツバメは小さなカエルを、大きくて綺麗な池のそばで下ろすと、言いました。「君の許しもなく、家から連れ出してごめんよ。帰りたかったら連れて帰ってあげるからね」返事もせず、小さなカエルは芝生の中へ飛び入っていきました。そしていろんな色の綺麗な花をたくさん見ました。こんな綺麗な花は見たことも、いいにおいを嗅いだこともありませんでした。「外の世界はなんて大きくて、素晴らしくて、美しいんだ！」小さなカエルはついに喜びで叫び、池の中へジャンプしました。

ツバメが戻ってきて聞きました。「カエルくん！ 井戸の外の世界はどう？」小さなカエルは言いました。「大きくって綺麗だね！ 本当にどうもありがとう。世界を見るために君が連れ出してくれなかったら、僕は井戸の外に、こんなにも綺麗なものがあるって、一生知ることにはなかったよ」小さなカエルは、二度と古井戸へ戻ろうとはしませんでした。